

気象研究ノート第 236 号

「都市における極端気象の観測・予測・情報伝達」発刊のお知らせ

気象研究ノート編集委員会

2010 年に、本書の刊行の背景となった研究プログラムが科学技術戦略推進費（科学技術振興機構/文部科学省）により開始された。地球温暖化の影響に適応するために、気候変動の適応策や緩和策の基礎となる要素技術を開発し実証実験を通じて社会システムの改革を目指すプログラムである。そのプログラムの中で採択された課題の一つに「気候変動に伴う極端気象に強い都市創り」（2010 年度～2014 年度）がある。この研究では、理学・工学・社会科学の研究者で構成される研究チームにより、首都圏に稠密気象観測網を構築して極端気象の発生プロセス、メカニズムを解明し、現象を早期に検知しエンドユーザーに伝達する極端気象監視・予測システムを開発することを目指した。そして、関係府省・地方公共団体・民間企業・住民と連携した社会実験を通じて研究成果の実用化を図るというものである。これらの目的を達成するために、研究プロジェクトには計 24 の機関と 90 名を越す研究者および自治体等の防災担当者が参加した。独立行政法人防災科学技術研究所（代表：真木雅之，中谷剛）が中核機関として全体を統括し、極端気象の解明を気象庁気象研究所（代表：石原正仁，小林隆久，山田芳則，小司禎教）、予測システムの開発を防災科学技術研究所（代表：三隅良平）、社会実験を東洋大学（代表：中村功）がそれぞれの課題を担当した。本書にはそれぞれの分野に参加した研究者の研究成果がまとめられている。

異なる分野の研究者が集まって進める複合研究は今後も主流になると思われる。気象研究においても例外ではないであろう。しかしながら、複合分野の研究の真の意義を理解できている人は私を含めて多くないかもしれない。本書が、今後の新たな気象研究のさきがけとなることを期待したい。

（真木雅之，前書きより）

【目次】

巻頭言

- 第 1 章 統計解析・環境場の解析
- 第 2 章 観測・解析手法の開発
- 第 3 章 事例解析によるメカニズム解明
- 第 4 章 ナウキャスト
- 第 5 章 データ同化手法の高度化
- 第 6 章 予測情報の応用
- 第 7 章 社会実験

【編集】小司禎教・三隅良平・中谷剛

【執筆者一覧（アルファベット順，50音順，カッコ内は執筆した章）】

Le Duc（5），足立アホロ（2，3），荒木健太郎（5），石原正仁（3），磯 敦雄（7），
稲垣厚至（1），井上 実（4），岩井宏徳（3），大石 哲（3），大塚清敏（7），大西晴
夫（7），小田僚子（1），折口征二（5），栢原孝浩（6），川島正行（3），川畑拓矢（5），
神田 学（1），楠 研一（2，3），國井 勝（5），後藤あずみ（4），小林文明（3），
斉藤和雄（5），斉藤貞夫（3），佐藤英一（2，3），佐野哲也（3），清水慎吾（5），下
川信也（6），出世ゆかり（4），小司禎教（2，3，5），末次忠司（3），菅原広史（1），
鈴木真一（3）、鈴木 靖（4），砂田憲吾（3），清野直子（1），瀬古 弘（5），外狩麻
子（7），中垣 壽（4），中谷 剛（7），中村 功（7），中村高志（3），中森広道（7），
南雲信宏（3），平野洪賓（4），廣井 慧（7），藤部文昭（1），藤吉康志（1，3），干
川剛史（7），本間基寛（4），前坂 剛（3），真木雅之（巻頭言），三隅良平（2，6），
道広有理（4），八木綾子（1），山内 洋（3，5），山路昭彦（4），山田 正（6），山
田朋人（6），横田 祥（5），横山 仁（7），吉原貴之（6），吉見和紘（6），若月 強
（6）

【仕様】 B5判 408頁、2018年5月28日発刊

【価格】 会員：5,500円，会員外：8,300円